

---

# これもひとつの、恋の終わり

林檎の葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これもひとつの、恋の終わり

### 【Nコード】

N7877E

### 【作者名】

林檎の葉

### 【あらすじ】

コナンの正体を知った歩美は、ショックで倒れてしまう。しかし、哀からあることを言われ、コナンに告白をする決意をする。

前編…もう楽になって…（前書き）

この小説は、「必ず生きて帰るから」のストーリーをもとに書いてあります。読んでいない方は、そちらからお読みください。

前編…もう楽になって…

「…つまり、コナンさんと工藤くんは、同じ人っていうことですか？」

「…はい。」

コナンくんの言葉が、信じられなかった。コナンくんが…：新一お兄さん？嘘…：そんなの、嘘だよね？もう何を信じればいいのか分からなくなつて、わたしはコナン君の顔を見た。その顔は、小学一年生のもんじゃないかった。大人びていて、凜として、かっこよくて。一瞬で分かった。ああ、嘘じゃないんだって。全部本当のことなんだって。わたし以外のもの全てが、わたしの目にはモノクロに見えた。世界に、色が無い。周りで何度か会話があつたような気がするけど、わたしの耳には聞こえなかった。まるで、世界にはわたししかいないようで。独りぼつちで、この地球上に存在しているような気がして、急に怖くなった。体中が震えた。

「じゃあ、新一、ちよつと行ってくるね。」

哀ちゃんと一緒に病室を出ようとした蘭お姉さんが、そう言った。コナンくんも、当たり前のように返事をしていて。それで、2人の関係が分かった。分かつちやつた。蘭お姉さんの声には、大好きっていう気持ちがいっぱい感じられて、コナンくんの顔には、愛しさがあふれていて。叶わない。叶わないんだ、この恋はそれが分かつたとたん、涙があとからあとからあふれてきて、止まらなくなつた。心配した元太くんや光彦くんが、何度も声をかけてくれたけど、それさえも別世界のように。もう、何も見えない。聞こえない。何も分からない！！

「ん…。」

まぶたの裏に、かすかに光を感じて、わたしは目を開けた。……ここ、どこ？

「気がついた？」

わたしは声がした方を向いた。

「哀ちゃん…、わたし…。」

「覚えてない？病室で急に倒れたのよ、あなた。ちょうどわたしたちが病室に戻ってきた時でね、蘭さんが医者を呼んでくれたの。」

蘭さん。その名前に、わたしはぎゅっと目を閉じた。その名前が、今は何よりも怖い。蘭お姉さんのせいじゃないのに。わたしが、弱かっただけなのに。…誰かのせいにせずにはいられなかった。それでわたしは、蘭お姉さんを選んだんだ。そんなことしたって、何も

変わりはないのに。

「…ごめんなさいね。自分のことではいっばいいっばいで、吉田さんのことまで頭が回らなくて…」

「哀ちゃんのせいじゃないよ!」

わたしは慌てて言った。そう、誰のせいでもない。悪いのは、わたしなの。わたしのココロが、弱かったから。だから、蘭お姉さんのせいにして、自分だけ楽になろうとしたの。サイテーだ、わたし。だから、哀ちゃんはそんな顔しないで。

「いいえ。わたしにも責任はあるわ。あなたの気持ちを知っていて、彼の気持ちも知っていたのに、何もできなかったから。」

「そんなこと…っ」

言いかけたわたしは、哀ちゃんの表情に、息をのんだ。これ以上ないくらい柔らかく、笑っていたから。こんな笑い方もするんだ、っですごく嬉しかった。

「…悲しいわよね。絶対に叶わない恋なんか、しても無駄。あなた、そう思ってない?」

びくり。凶星を指されて、肩が震えた。言葉を返すことができなくて、長い沈黙が続いた。

「でも、わたしたちまだ7歳なのよ?まだまだこれからでしょう。これからの恋を諦めるには、早すぎるわ。」

哀ちゃんが、自分に言い聞かせるように、ゆっくりと言った。でも、だって。絶対に叶わない恋をしたところで、何の意味があるっていうの!?

「恋愛に限らず、何か一つ、真実を受け入れることで、人は成長するのよ。この地球上に、意味がないことなんて一つもないわ。」

哀ちゃんが淡々と言った。まるで経験したような口ぶり。哀ちゃん、あなた、いったい誰…?

「あの2人の中を割くことなんて、誰にもできないわ。羨ましいのを通り越して、呆れるぐらいに仲がいいから。…本人たちにその意識はないようだけど。」

哀ちゃんが小さく笑った。あ、哀ちゃんもコナンくん  
—お兄さんのことが、好きなんだ。直感で分かった。でも、なぜか口に出すのは躊躇した。 新

「でも、自分の気持ちを押し隠しているのは良くないわ。誰かに思いを打ち明けて、初めてふっきれるものよ。」

その言葉に、わたしははじかれたように顔を上げた。わたしの気持ち……伝えても、いいの?

「あなたは、本人に直接言うのが一番いいと思うの。大丈夫、誰もあなたを責めたりしないわ。」

その言葉に、またわたしの涙腺が緩んだ。そっかあ。わたし、もう楽になってもいいんだあ。そう思ったら、急に安心した。哀ちゃんがわたしの肩を抱いて、背中をさすってくれる。そんな優しさが、

今は何よりも嬉しかった。ねえ、コナンくん。もうすぐ言うから、待ってて。「素敵な思い出を、ありがとう。」って、必ず言うから。もう、逃げない。立ち止まったりしない。だからせめて、わたしが想いを伝える時だけは、わたしが好きだったコナン君でいてください。



前編：もう楽になって…（後書き）

こんにちは、林檎の葉です。歩美ちゃんメインに初挑戦しました！歩美ちゃん優しいので、蘭ちゃんと価値観が微妙にかぶってるような…。優しいって時には辛いこともあるんですね。

この小説、歩美ちゃんの成長記録のつもりで書いてます。でも、完結した頃には元太や光彦よりもずっと大人びてるんでしょうねえ。まずい、バランスが~~~~~。

後編はいよいよ告白です。歩美ちゃんファンにも新蘭ファンにも楽しめる小説にするので、ぜひ読んでくださいね！

よかったら評価お願いします。

後編：幸せになつて…

「コナンくん、話があるの。」

退院のお祝いパーティーを終えて、片付けも終えてから、事務所の屋上にコナンくんを呼び出した。事務所を出る時、そつと肩に手を置いて微笑んでくれた哀ちゃんに目でお礼を言いながら、ドアの外に出る。階段を上つて、屋上のドアを開けた。少し強めに吹く風が、今の季節には肌に心地いい。わたしは一つ深呼吸をすると、コナンくんの方を振り向いた。思いきつて言う。

「コナンくん。わたし、コナンくんのことが好き。」

それを聞いたコナンくんは、一瞬目を見開いたあと、すぐ目をそらした。「ごめん。」つて、小さく聞こえた。瞳は哀しみに満ちている。お願いだから、そんな顔しないで。コナンくんは、何も悪くないよ。

9

「わたしの気持ちに伝えてほしいんじゃないんだ。…わたしの気持ち、コナンくんに直接伝えたかつたの。ただそれだけ。」

「歩美…。」

「2人にはね、幸せになつてほしいんだよ？わたしも、2人が幸せそうにしてるとわたし嬉しいから。…そりゃ、全く悲しくないって言ったら嘘になるけど。でもわたし、コナンくんのことも蘭お姉さんのことも大好きだから。…素敵な思い出を、ありがとう。本当にありがとう。どうしてもこれが言いたくて、呼び出したんだ。」

一気にそう言って、ためていた息を吐いた。何度も心の中で練習したのに、やっぱりいざとなると緊張してしまう。いつまでたってもコナンさんの反応がないから心配になって、わたしは顔を上げた。見ると、コナンさんはやれやれ、といった感じで肩をすくめている。…わたし、何か変なこと言った？

「…参ったよ、降参降参。まさかそんなこと言われるなんて思っ  
てなかった。」

「…え？」

思いがけない言葉に、わたしはきよとんとした。

「話があるって言われた時から、告白だろうなって思っ  
てはいたんだ。今まで数え切れないほど告白されたから、こういう雰囲気には慣れてるし。階上がってる時も、どう断ろうかって、ずっとそればかり考えてた。…いや、あの日、歩美が泣いてるのを見た時からかな。ずっと罪悪感ばかり押し寄せてきてさ。だから、まさかお礼言われるなんて思っ  
てなかったよ。」

コナンさんが笑いながら言った。その一言一言が、心にしみる。強めの風が頬を撫でた。

「オレの方こそ、ありがとな。こんなオレを好きになってくれて。」  
今度はわたしが驚く番だった。「ありがとな、こんなオレを好きになっ  
てくれて。」その言葉を、何度も何度も心の中で繰り返す。あ  
あ、わたしやっぱり、コナンさんのことがまだ好きなんだ。そして、  
これからもずっと好き。たぶん、これから好きな人ができるまで、  
ずっと好きだと思う。そして、好きな人ができて、コナンくんは

わたしの中で大きな存在で、一生忘れられない。だって、コナンくんは運命の相手だと思っていたことに変わりはないから。こんなに優しいことを言ってくれる人なんて、きっとこの先、いくら待っても現れない。でも、わたしが好きになったのはコナンくんであって、新一お兄さんじゃないから。わたしの中では、やっぱり2人は別人なの。だから、新一お兄さんは蘭お姉さんと幸せになっほしい。わたしの恋は叶わなかったけど、コナンくんは、コナンくんとの思い出は、わたしの心でいつまでも咲き続けるから。だから、2人は絶対幸せにならなきゃだ。

「そろそろ戻ろっぜ、歩美。」

コナンくんはそう言って屋上のドアを開けた。わたしもそれに続いて、階段を降り始めた。

「蘭お姉さん！」

事務所に戻ってから、一番に蘭お姉さんに声をかけた。

「新一お兄さんと、絶対幸せになつてね！」

その言葉に、蘭お姉さんは一瞬真っ赤になると、ふわりと微笑んだ。その笑顔は、同性のわたしでも見とれてしまうほど綺麗で。新一お兄さんの気持ち、ちよつとだけわかったような気がした。新一お兄さんは、この天使のような笑顔が、何よりも大好きなんだ。分かつたら微笑ましくなつて、気づかれないようにちよつとだけ笑つちやつた。

「吉田さん、そろそろ帰りましょう。」

「うん、ちよつと待つて！」

わたしは哀ちゃんの言葉にそう答えると、カーディガンをはおつたふと見ると、新一お兄さんと蘭お姉さんが楽しそうに話しているのが目に入った。2人とも、幸せそうに笑つてる。それだけで、わたしは嬉しくなつた。絶対叶わない恋だったけど、結局ふられちゃつたけど、後悔はしてない。わたし、哀ちゃんが言つたみたいに、成長できたかな。そうだつたら嬉しいな。わたしはお月さまに向かつて、心の中で呟いた。

これも一つの、恋の終わり。

後編：幸せになって…（後書き）

こんにちは、林檎の葉です。

ついに歩美ちゃん、告白しましたね！これでみんな幸せになれたので、よかったですよかったです^^

歩美ちゃん、すごい成長しました！恐れていた通り、元太と光彦とのバランスがやばそうです（笑）。「2人には幸せになってほしい」なんて、大人でもそう言えませんよ…。恋愛に関しての精神年齢はかなり跳ね上がったみたいです（笑）

次回作は短編かな。もちろんコ（新）蘭で！もしかしたらコナンから見たものと蘭から見たものの2つかくかもしれません。（べつのストーリーで）投稿したらぜひ読んでくださいね！

よかったら評価お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7877e/>

---

これもひとつの、恋の終わり

2010年10月12日09時11分発行